

「こころとからだのしくみⅢ」の授業改善手法とその効果

Educational improvement and the effects on 'Mechanism of the Mind and Body Ⅲ'

福田 明 尾台 安子 釜土 禮子 丸山 順子
Akira FUKUDA Yasuko ODAI Reiko KAMADO Junko MARUYAMA

合津 千香 赤沢 昌子 齋藤 真木 小坂 みづほ
Chika GOZU Masako AKAZAWA Maki SAITO Mizuho KOSAKA

要旨

2014 年度入学生から介護福祉士養成校でも国家試験が義務化されることになった※¹⁾。これを受け、1 年次の段階から国家試験合格に向けて更なる授業改善を図っていくことが求められるようになった。そしてその際は、学生にどのような成果があったか否かの評価も必要になる。

2014 年度前期、本学介護福祉学科では、埼玉福祉専門学校が授業で導入しているコマシラバス等を活用して「こころとからだのしくみⅢ」（1 年生 45 人）を対象に授業改善に取り組んだ。具体的には、①3 つの要素で授業内容の検討→②初回オリエンテーションでの 3 つの説明→③授業での 5 つの工夫、という順に進めた。その結果、同じ試験問題の成績について 2013 年度生（平均 84.3 点）よりも 2014 年度生（平均 88.3 点）のほうが有意に高く（ $p = .05$ ）、授業改善効果が示唆された。

本実践からは、①「時間があるなかで重要な知識を確実に」という発想への転換、②オリエンテーションやコマシラバスの活用等による学ぶ目的意識や動機を促す説明責任、③毎回の小テストの実施等、復習の機会を設けたり、やる気を促したりするような細やかな仕組み、④複数の工夫による複合的な授業改善、が必要と思われた。

【キーワード】 授業改善、オリエンテーション、コマシラバス、小テスト、こころとからだのしくみ

Ⅰ．はじめに

2014 年度入学生から介護福祉士養成校でも国家試験が義務化されることになった※¹⁾。これを受け、介護福祉士養成校は 1 年次の段階から国家試験合格に向けて更なる授業改善を図っていくことが求められるようになった。

しかし、現状では、科目によって異なるものの、授業をどのように設計し、展開していけばよいのか、その授業内容・方法を明確につかめないうまま、授業を開始してしまった感が拭いきれない教員もいる¹⁾。では、日々の授業内容・方法を明確にし、授業展開に対する戸惑いを解決・緩和していくためにはどうすればよいのであろうか。

日本介護福祉士養成施設関東信越ブロックの課題分科会「教員への教育」委員会では、教員研修のあり方を探るために 2012 年度に教員へのアンケート調査を実施した。その結果、比較的勤務年数が短い新任教員の悩むところが「授業展開」であった。同委員会のなかで、埼玉福祉専門学校で取り組まれている「コマシラバス」が紹介され、長野県で開催される関東信越ブロック教員研修会（2014 年 8 月 22 日）においてコマシラバスの紹介と実践報告をする

ことにした。そこで、ちょうど授業改善への取り組みをする必要性を感じていたため、本学介護福祉学科で取り組むことにした。

埼玉福祉専門学校では、科目ごとに毎回（1 コマ毎）の授業内容・方法を明記したコマシラバスを作成し、それに基づき授業を行っている。このコマシラバスを活用した結果、教員が 1 回（コマ）ごとの授業で何を学生に伝えるべきか、という視点が明確になったり、授業の進行がスムーズになったりする等の効果がみられた。しかし、こうした授業改善の取り組みが教員だけでなく、学生に対してどのような学習成果を生み出すかについては、まだ十分な検討が行われてはいない。

一方で、社団法人関西経済同友会大学改革委員（2009）は、早い段階から「各教員は学生を教えることの意味をきちんと捉え、大学はその成果を評価する必要がある」と指摘している²⁾。

そこで、本学介護福祉学科では、まず 1 科目のみを対象に、埼玉福祉専門学校の取り組みを参考にしつつ、国家試験も見据えたうえで、コマシラバスを活用した授業改善とその評価に取り組むことにした。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、コマシラバスを活用した授業改善が学生にもたらす影響を明らかにすることである。本稿では、本学介護福祉士学科での授業改善の取り組みとその成果を報告し、授業内容・方法のあり方を検討する機会としたい。

Ⅲ. 対象と方法

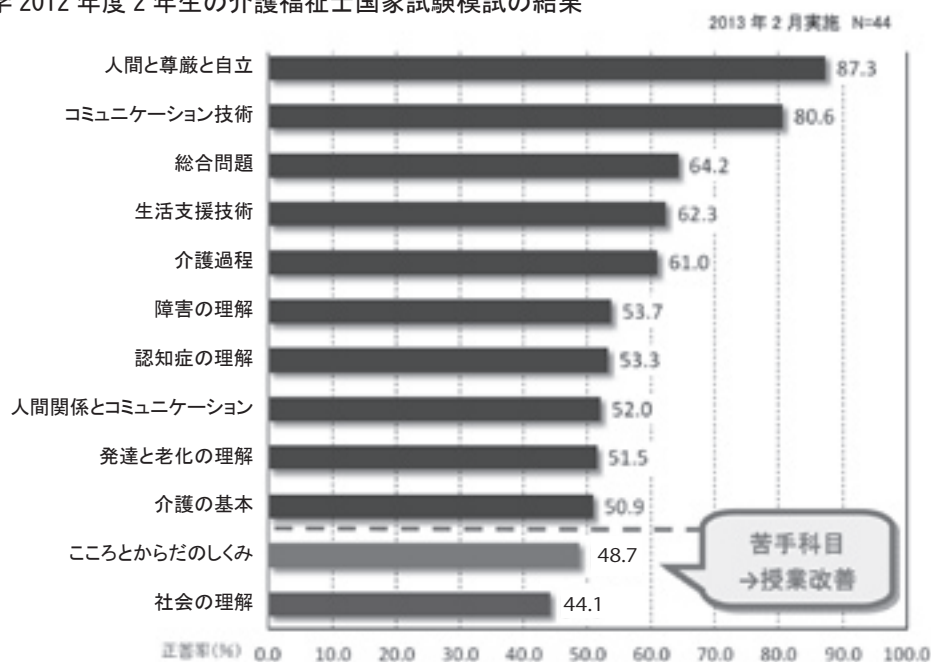
1. 対象科目の選定

「こころとからだのしくみⅢ」は、身だしなみ・

清潔等の生活行為に関するこころとからだのしくみを教授する科目である。

「こころとからだのしくみ」は、生活支援技術の基本的知識となるが、その知識の定着率は低い。例えば、2013年2月、本学介護福祉士学科2年生44人を対象に第25回介護福祉士国家試験模擬試験を行った。その結果、「人間の尊厳と自立」「コミュニケーション技術」「生活支援技術」等の正答率が6割を超えたのに対し、「社会の理解」の正答率は44.1%で最も低く、次いで「こころとからだのしくみ」が48.7%と2番目に低かった(図1)。したがっ

図1 本学2012年度2年生の介護福祉士国家試験模試の結果



て、2014年度、「こころとからだのしくみⅢ」(1年前期15回)を対象に授業改善に取り組むことは意義がある。

2. 対象者

「こころとからだのしくみⅢ」を受講する本学介護福祉学科1年生45人を対象とした。

3. 倫理的配慮

授業終了時のアンケートは、来年度の授業や今後の研究・発表等に生かしていくこと、アンケート提出の有無が成績評価に関係しないこと等を学生に対して説明し、これに同意を得られた学生に無記名で回答してもらった。同時に、授業資料と小テストの実物についても、匿名を条件に2人の学生から公表の許可を得た。

4. 研究方法

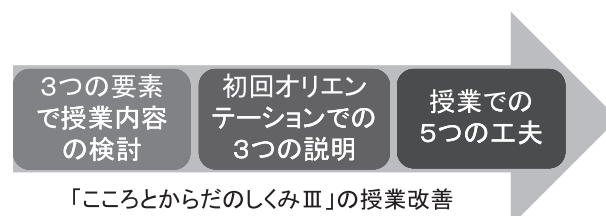
本研究は、次の流れで行うことにした。①「ここ

ろとからだのしくみⅢ」のコマシラバス作成・活用による授業内容・方法の工夫を行う。②授業改善を教員だけが振り返るのではなく、学生の視点も加味するため、授業終了後にアンケートを実施する。③授業改善が学生の成績に反映したか否かについて明らかにするため、昨年度の1年生(現2年生)の試験(試験問題は同一)結果との比較検証を行う。

Ⅳ. 「こころとからだのしくみⅢ」の授業改善

「こころとからだのしくみⅢ」の授業改善は、授業開始前における授業内容の検討、授業開始時のオ

図2 3段階による授業改善



リエンテーション※²⁾、授業での5つの工夫の3段階で進めた(図2)。

1. 3つの要素で授業内容の検討

各授業で何をどこまで、どう教えるかは、各担当教員の自由裁量に任されているとの考え方もあるが、そうであれば、大学は私塾の集まりとなってしまう³⁾。なかには、アレもコレも教えたい教員もいるし、その気持ちもわからないでもない。例えば、「介護の現場で役立つ知識を少しでも多く教えたい」と考えている教員は多いことだろう。

ただし、そうした教員の経験知と学生の理解度には差があり、学生の許容量を考えずに、教員の思いだけが先行してしまうと、かえって学生は混乱してしまう。一般的に最近の学生は、1回の授業で学ぶべき内容が増えれば増えるほど、未消化になってしまう傾向がある。未消化のまま、次に進むとわからないことがさらに増え、授業内容の未消化が進行してしまう。この傾向は、他分野での学習でもある。

例えば、プログラミングの学習にあたり、1つのプログラムにたくさんの学習内容が詰まっていると、これが学習者のつまづきの原因になってしまう。一方で、教える側はプログラミングを熟知しているがために、知らず知らずのうちに一度にたくさんの学習内容を詰め込んでしまう⁴⁾。

したがって、こうした悪循環に陥らないためにも、単に教員の経験値や教科書にあることをまんべんなく扱うのではなく、重点を置いて指導する内容の把握が重要になってくる⁵⁾。

具体的には、学生が1回1回の授業で「今日は○○について学んだ」「今日は□□の重要性がわかった」というように、基本的事実・知識を正確に学んだことを実感できるよう、予め授業内容を絞り込んでおく必要がある。その際、教員は少なくとも①その科目で教育すべき内容は何か、②国家試験対策を

視野に入れ、過去問題の出題内容はどうなっているか、③介護福祉士になる学生に対して教員自身が強調して教えたい内容は何か、の3点について熟知し整理しておく必要がある。つまり、授業内容の整理を教育すべき内容、過去に出題されている内容、教員自身が強調して教えたい内容で構成していくことが望ましい(図3)。

授業改善というと、授業方法のあり方だけを問う場合もみられる。しかし、それ以前の課題として、まず授業内容をきちんと定めておくことを忘れてはならない。なぜなら、授業内容が定まらなければ、それに適した授業方法を見出すことができないからである。

2. 初回オリエンテーションでの3つの説明

近藤(2001)は、つまらなかった講義として、なぜ、このようなことを学ぶのかがわからないもの、全体像がわからないもの等をあげたうえで、「よい授業」のキーワードに「オリエンテーション」「動機づけ」をあげている⁶⁾。川廷(2008)は、学生たちにとって、その知識・技術が何のために必要なのか、どのように使うのかがわからなければ学習の意欲が湧いてこないと指摘している⁷⁾。小笠原ら(2002)も、学生が主体的に授業に参加して主体的に学ぶためには、学生がその授業で何を教わり、何を学習するのか、その方法は何か、どのように評価されるのか等について具体的にわかっておく必要があると提言している⁸⁾。

こうした指摘を踏まえ、初回オリエンテーションでは、最低限①カリキュラム全体と授業科目との関連、②他科目と授業科目との科目間連携、③授業科目の内容、の3つの説明が必要である。

1) カリキュラム全体と授業科目との関連の説明

カリキュラム全体については、入学時オリエンテーションで行っている。しかし、学生たちの理解にはつながっていない。専門科目が前期から一斉にスタートしていくため、カリキュラム編成と授業科目との関係を学生にもわかる形で押さえるようにする必要がある。それを踏まえたうえで、なぜ「ここからだのしくみ」を学ぶのかという動機づけを行った。

2) 他科目と授業科目との科目間連携の説明

他科目と授業科目との科目間連携については、図4を用いて説明した。具体的には、「ここからだのしくみⅢ」では、主に身じたく、口腔ケア、清潔・入浴に関連した知識やそれらが心身に与える影響等を学び、1年後期にはそれを受ける形で「生活支援技術の基本Ⅲ」で衣服の着脱介助や片麻痺のあ

図3 3つの要素で授業内容の検討

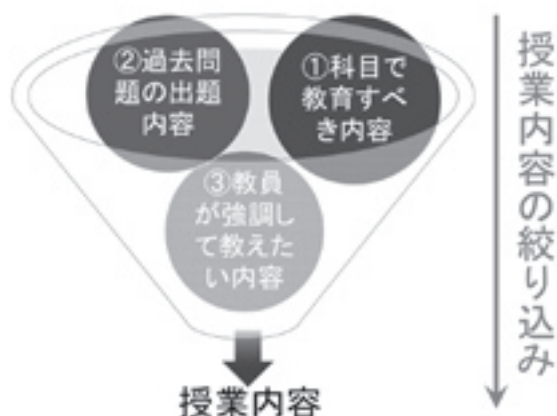


図4 他科目と「こころとからだのしくみ」との科目間連携

	科目名	主な内容		科目名	主な内容
講義	こころとからだのしくみⅠ	移動の基礎知識	演習	生活支援技術の基本Ⅰ	身体の動き 車椅子介助等
	こころとからだのしくみⅡ	食事・排泄の基礎知識		生活支援技術の基本Ⅱ	食事介助 排泄介助
	こころとからだのしくみⅢ	身支度・口腔ケア・清潔・入浴の基礎知識		生活支援技術の基本Ⅲ	着脱介助 口腔ケア 入浴介助 清拭等
	1年前期 15回(コマ)			1年後期 15回(コマ)	

る利用者を想定しての衣服の工夫、清潔保持・入浴介助等の演習に取り組む、というように学びに連続性・関連性があることを説明した。

3) 授業科目の内容説明

授業科目の内容説明では、シラバスをどう活用し、何を学生に伝えるべきかが問われることになる。具体的には、シラバスを用いて①何のために学ぶのか(学習への目的意識)、②どのような流れで学んでいくのか(学習のプロセス)、③どのような方法で学ぶのか(学習の方法)、④学びの成果をどのようにみるか(学習の成果確認)という「学びの4つの視点」を学生に意識させることが重要である。そこで、「こころとからだのしくみⅢ」の初回授業で、シラバスに基づき上記①～④を中心に説明した。

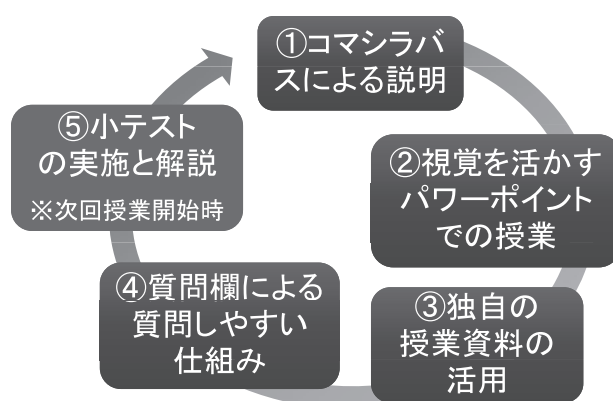
その際、本学ではシラバスを冊子としてまとめているが、本授業では冊子のなかから「こころとからだのしくみⅢ」の該当箇所をコピーして説明用資料のなかに組み込み、それを学生全員に配布した。冊子のままだと、該当科目のシラバスを探すのに手間がかかり、初回の授業以降、学生が冊子を持参することがなくなってしまう。そこで、シラバスは授業で配布する資料等と一緒にファイリングし、確認したい時に見られるようにしておくことが望ましいと考えた。

3. 授業での5つの工夫

毎回の授業では、教員の話し方や視聴覚機器等も重要になってくる。しかし、授業改善の方向性としては、それらだけでなく「シラバスの詳細化と授業の明確化」「授業内容の理解度把握」「授業評価や学習到達度の点検」等があげられている⁹⁾。

そこで、毎回の授業は、コマシラバスを作成し、コマシラバスに沿った授業内容の説明→視覚を活かすパワーポイントでの授業→独自の授業資料の活用→質問欄による質問しやすい仕組み→小テストの実

図5 授業での5つの工夫



施と解説、という流れで行った(図5)。以下、実施順に紹介していく。

1) コマシラバスによる説明

文部科学省中央教育審議会(2012)は、大学教育の質的転換に向けて、教育課程の体系化、組織的な教育の実施等に加え、授業計画の充実をあげている。そのうえで、授業計画は単なる講義概要(コースカタログ)にとどまることのないように作成する必要性を指摘している¹⁰⁾。そこで、埼玉福祉専門学校の授業実践を参考に、本授業においても、1科目15回(コマ)分のシラバスとは別に、1回(コマ)ごとの授業計画等を示したコマシラバスを独自に作成した。

具体的には、①その日の学習目標、②それを達成するための重要ポイント、③重要ポイントの資料掲載ページ、④授業方法、⑤使用教材、⑥教員の一言、⑦質問欄の7項目から構成し、A4用紙1枚にまとめた(表1)。

このコマシラバスを毎回、授業の冒頭で学生に配布して説明し、「今日の授業でなぜ、それについて学ばなければならないのか」「学習目標は何か」「そのために覚えなければならない重要ポイントは何か」等について説明した。

例えば、身じたくに関する授業の冒頭では、「教員の一言」で教員が執筆した新聞記事と照らし合わせて『『着衣着火』(ちゃくいちゃっか)という言葉を見聞きしたことはありますか?』と学生にまず問いかけた。そして「実は衣服が原因で、場合によっては危険になることもある。それを今日の授業で学びましょう」と続けた。

また、試験前の口腔ケアに関する授業では、「『芸能人は歯が命』『介護福祉士も歯が命』ということで、2年に1回は歯科医院に行こうと決めている私です。とはいえ、現実には、後回しになっていますが……みなさんは、次回の試験に向けた準備を後回しにしな

表1 「こころとからだのしくみⅢ」(3回目)で
用いたコマシラバスの実際

コマシラバス							平成28年度	
科目名	こころとからだのしくみⅢ	時間数	30	単位数	2	担当	藤田 晴	
学科	介護福祉学科	学年	1	学期	前期	回	全 15 回 中	
授業日	平成 28 年 4 月 23 日 (水)	第 1 時	数		第 3 回 目			
本日の目標 ①衣服の「3つの役割」について理解できる。 ②「着衣着火」を理解し、その予防法を考えることができる。 ③体温調節を助ける衣服の「3つの役割」について理解できる。								
授業のポイント						資料等の 該当ページ	方法	
1	インジック物語「北風と太陽」から衣服の必要性について考える					資料P1	質問—全体発表	
2	衣服の「3つの役割」の全体像					資料P1	講義 パワーポイント	
3	身体を保護する衣服の役割とは?					資料P1・2	講義 パワーポイント	
4	「着衣着火」って何? 「着衣着火」の予防法を考えよう!					新聞 週刊まつもと	他員の新聞記事 グループワーク	
5	体温調節を助ける衣服の「3つの役割」とは?					資料P2・3	講義 パワーポイント	
6	衣服の素材—「天然繊維」と「化学繊維」とは?—					資料P3・4	講義 パワーポイント	
7								
8								
使用教材	資料A3 1枚(表裏) / 新聞記事「週刊まつもと」(2013年2月15日)							
タイトル	資料「衣服の役割—身体的(生理的)意味を中心に—」 / 新聞記事「着衣着火」事故にご関心							
教員の一言								
「着衣着火」(ちやひちやう)という言葉を覚えましたことありますか? 実は私にも身近な衣服が原因で、事故によっては身体に危険をおよぼすこともあるのです。私が以前に書いた新聞記事 も参考にしながら、今日は「着衣着火」についても学び、その予防法をみんなで考えてみましょう!								
教員への質問								
学級番号 氏名								

いように!」とコメントし、学生の笑いを誘ったこともあった。

つまり、コマシラバスは、いきなり授業に入ること避け、学生がこれから始める授業に興味・関心を持ち、授業に入りやすくするための導入ツールともいえる。早川(2010)も、衣生活分野の授業における導入部分に介護事例を取り入れたことで、学ん

だ知識が介護現場でどのように活かされているのかがイメージされやすくなり、学生からも高い授業評価を得たと報告している¹¹⁾。

2) 視覚を活かすパワーポイントでの授業

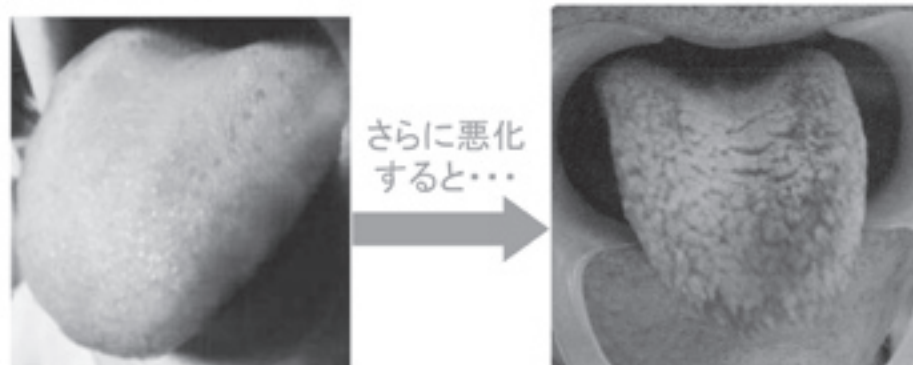
378校5万6308人の大学・短期大学の教員(助教以上)を対象に行った調査によれば(回答率30.7%)、教育の質的転換を図るために大学全体として取り組むべき対策として「学士力の明確化とそれを実現するためのカリキュラム、教育プログラムのシステム化と可視化の構築」(4割弱)をあげた回答が多かった¹²⁾。タブレット端末といったICT(Information and Communication Technology=情報通信技術)を活用した教育が注目され始めている一因として、文字と口頭による授業の限界があると思われる。

例えば、教員としては丁寧に説明するつもりで作成した資料でも、それが文章だらけだと、かえって学生の学習への抵抗感を強めてしまう結果になりかねない。そこで、「こころとからだのしくみⅢ」では「見える化」によるわかりやすさを重視してパワーポイント(Power Point)を活用して授業を行うことにした。

文字だけでは説明しにくい専門用語が多い介護福祉士養成教育では、視覚から得る情報のほうが学生にはわかりやすい場合がある。

例えば、口腔ケアに関する授業では、「舌苔」という用語が出てくるが、これを文字と口頭の説明だけで学生に理解してもらうのは難しい。しかし、「舌苔」を実際にスライドで見れば、「舌苔」とはどのような状態かがすぐに学生もわかり、介護福祉士としての観察力も養うことができる。

図6 「舌苔」のスライド



本学介護福祉学科での特別講義「要介護高齢者の口腔ケア」(2013年12月12日)で
用いられた資料より引用

授業では、図6のような「舌苔」のスライドを用いた。まさに一目瞭然といえ、学生が「わかりやすい!」とアンケートで回答してあった。

なお、丁寧な説明が十分にできなかつたり、授業についてこれられない学生が目立ってきたりしてしまうのを避けるために、毎回の授業で用いるパワーポイントのスライドは、18～24枚程度を上限とした。また、1枚のスライドに文字・文章を多用しないことも心がけた。

3) 授業に即した独自の授業資料の活用

毎回、パワーポイントと連動するように独自の授業資料を作成し、授業はそれに沿って行った。具体的には、重要ポイント等は空白になっており、学生がスライドを見て、直接書き込む方式とした(図7)。

授業では、テキストを用いず、授業資料を1～2枚配布している。テキストや製本した資料集だと予習してくる学生には効果があるかもしれないが、そうでない学生のなかにはテキストや資料集が手元にあると、そのこと自体で安心してしまい、授業に主体的に参加しない人もいたため、あえてテキストを用いることをしなかった。そこで毎回、授業資料を

配布するようにし、真剣に授業に参加しないと空白を埋められないようにした。すると、先が読めないことで、かえって好奇心を喚起させたのか、なかには「次回はどんな資料が配られるの?」と発言した学生もいた。アンケートからも「空いている箇所に直接書くということが、理解しやすかった」等の意見を確認できた。

なお、授業資料も含めて配布資料については、パンチで穴を開ける等、必ずファイリングして整理しておくことを学生に義務づけた。とはいえ、なかには、他の科目とゴチャゴチャにしてファイリングしてしまう学生もいた。授業資料は、1～15回目の授業展開を当初から意識し、全体を通してつながりがもてる構成を心がけて作成しており、毎回配布している資料を順番に丁寧に整理していくと、授業終了時には1冊のオリジナルテキストが完成するように工夫した。

4) 質問欄による質問しやすい仕組み

授業終了前3分間程度を質問や意見を聞く時間に充てている教員もいる。しかし、全員の前で勇気をもって質問等できる学生はなかなかいない。そこで、

図7 パワーポイントと連動した独自の授業資料

Figure 7 displays a grid of 12 worksheet templates, organized into 3 rows and 4 columns. Each template is designed for students to write answers directly on them, corresponding to the PowerPoint presentation.

- Row 1: Teeth and Gum Tissue Changes**
 - Column 1: Text boxes for notes on changes in teeth and gum tissue with age. Includes a diagram of a tooth cross-section.
 - Column 2: Diagram of a tooth cross-section showing the relationship between the tooth and gum tissue.
 - Column 3: Text boxes for notes on changes in teeth and gum tissue with age. Includes a diagram of a tooth cross-section.
 - Column 4: Diagram of a tooth cross-section showing the relationship between the tooth and gum tissue.
- Row 2: Saliva and Oral Mucosa Changes**
 - Column 1: Text boxes for notes on changes in saliva and oral mucosa with age. Includes a diagram of a bottle of saliva.
 - Column 2: Multiple-choice question: "唾液は1日にどのくらい分泌されるか?" (How much saliva is secreted per day?). Options: A: 250ml~500ml, B: 500ml~1000ml (1l), C: 1000ml~1500ml (1l~1.5l). The correct answer is C.
 - Column 3: Text boxes for notes on changes in saliva and oral mucosa with age. Includes a diagram of a bottle of saliva.
 - Column 4: Multiple-choice question: "唾液は1日にどのくらい分泌されるか?" (How much saliva is secreted per day?). Options: A: 250ml~500ml, B: 500ml~1000ml (1l), C: 1000ml~1500ml (1l~1.5l). The correct answer is C.
- Row 3: Gum Inflammation**
 - Column 1: Text boxes for notes on gum inflammation. Includes a diagram of a tooth cross-section.
 - Column 2: Text boxes for notes on gum inflammation. Includes a diagram of a tooth cross-section.
 - Column 3: Text boxes for notes on gum inflammation. Includes a diagram of a tooth cross-section.
 - Column 4: Text boxes for notes on gum inflammation. Includes a diagram of a tooth cross-section.

コマシラバスに質問欄を設け、授業日やその日以外でも気軽に質問できる仕組みを整えた。

具体的には、授業中、質問できなかった学生が質問を書き、授業後、それを教員に手渡すか、研究室のボックスに入れるようにした。質問に対しては、教員が記述で回答するという流れを作った。その結果、授業時間外に計4件の質問が寄せられた。「衣服の裾はどこからどこまでをいうのですか」という質問もあれば、なかには「肺に入ってしまった食べ物は一体どうなるのでしょうか」等の鋭い質問もあった。重要な質問については、授業のなかで「□□の質問があり、それへの回答は〇〇です」と伝え、全体で共有した。

5) 小テストの実施と解説

公益社団法人私立大学情報教育協会(2014)は、授業内容を写真・動画で持ち帰ることでノートをとらない等、理解しているようで理解していない学生もいるとし、その改善策として授業中にメモを頻繁にとらせることや頻繁に小テストを行って学びを確認する、といった工夫の必要性を指摘している¹³⁾。本授業においても、学生が学習内容を再度意識し、それらを確実に習得することが重要と考え、毎回、小テストを行い、前回の授業内容を理解し授業目標をクリアしているか、その学習成果を確認することにした。

具体的には、授業開始時に前回の学習目標や重要ポイントと連動したA4用紙1枚の問題(○×・穴埋め・記述問題8～15問)を出題し、5～10分で解答する。その場で正答を板書し、学生は自己採点し、間違った箇所はその場ですぐに赤字で訂正する。そして学生の理解促進を図るため、なぜ、その正答になったかを解説するという流れで行った。

こうした取り組みの結果、「毎回、小テストを行ってもらったので、1回1回の授業の復習ができて助かりました」「小テストを毎回行うことで、ポイントを押さえやすく、学習の積み重ねができました」といった学生の意見をアンケートからも確認できた。

学生が自己採点・訂正した小テストは、毎回その場で回収し、教員が各学生の小テストの結果を再度確認する等、学生と教員による相互チェックの体制をとった。特に学生全員の点数を毎回、パソコンに入力して平均点を求め、つまづきやすい問題を探り、その部分については次の

授業の冒頭で補足説明した。

また、毎回、小テストが満点だった学生には「あっぱれ」ハンコを、惜しくも1～2問不正解だった学生には「満足」ハンコを押した。アンケートからは「あっぱれ・満足のハンコが押されていた時は嬉しかったし、次も頑張ろうと思った」等、ハンコを1つのきっかけにしてやる気が高まった学生もいたことが確認できた(図8)。

さらに小テストへのやる気を引き出すために、中間試験と期末試験では小テストから多くの問題を出題するようにした。その根拠として、星野・坂本・田村ら(2006)は、学習意欲は試験出題部分を予告した講義の方が、予告をしない他の講義よりも、有意に高かった($p < .001$)と報告している¹⁴⁾。毎回の授業をしっかりと取り組まないと小テストは回答できない問題となっているが、逆に毎回、主体的に授業に参加している学生にとっては「小テストから出題されるので、テスト前に焦らなくてすむ」「日頃の勉強の成果が発揮できる」といった安堵の声が聞かれた。

こうした工夫もあってか、小テスト1～14回の平均点(1年生45人の結果を10点満点換算)は、6.4点と6割を超えた(図9)。

なお、中間試験(2014年5月21日実施)を受けた44人の平均点は88.7点、期末試験(2014年7月30日実施)を受けた45人の平均点は84.6点だった。

図8 小テストの実際と満点時の「あっぱれ」ハンコ

1. 次の記述のうち、適切なものには○、不適切なものには×をつけなさい(各1点)。

1) (X) 入浴や運動時の入浴では利用者の全身の状態を確認できるが、利用者とコミュニケーションを図る機会とはならない。

2) (O) 下痢がひどい場合は、入浴は避け、水分補給をこまめに行う必要がある。

3) (X) バイタルサインといった場合、一般的には体温(体温=body temperature)、脈拍(P=pulse)、呼吸(R=respiration)の3つを指す。

4) (X) 入浴後、利用者の変化を確認したり、水分補給を促したりする必要があるが、利用者入浴で満足したかは確認しなくてもよい。

2. 次の記述の()内にはある適切な語句を記入してください(各1点)。

1) 利用者によって入浴は①(浴力)を消耗し、状態の悪化を招く恐れもある。事前(2) (バリエーション)を確認する等、体調確認を必ず行う。

2) 入浴時等、利用者に異変がみられた場合には介護職員他に医師や③(看護師)等にも速やか報告する。

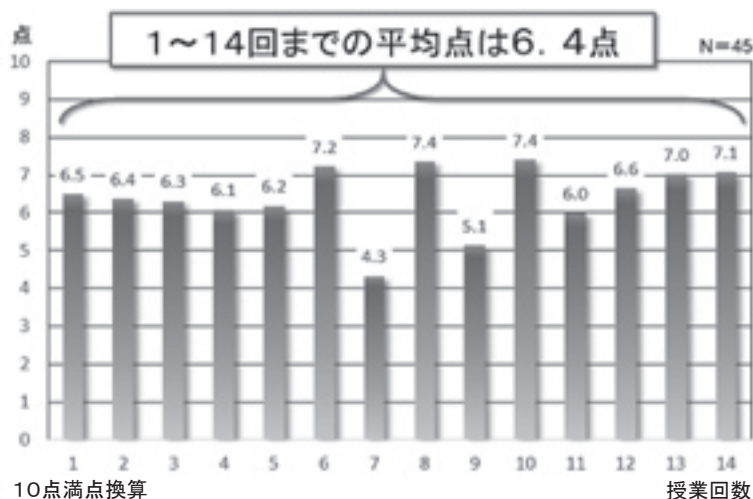
3) ④(汗)とは液体が気体になるときに周囲からも吸収する熱のことである。例えば、体が濡れていると、表面の水分が体温をうばって蒸発するため、寒くなるので、利用者の保暖めには注意する。

4) 脱衣室や浴室は濡れていたり、段差があったりすると⑤(転倒)の原因になる。

5) 施設等で事故が起こりそうな場面を察知した×マークを見ながら、そこに潜む危険を探していく事だ。

学号 満点の「あっぱれ」ハンコ 点数 10 / 10

図9 小テスト1～14回の平均点



V. アンケートにみる学生の授業評価

2014年7月23日の14回目の授業終了後、介護福祉学科1年生45人を対象に「こころとからだのしくみⅢ」のアンケートを行った。自由記述に加え、授業に関する17の質問項目について4段階の選択肢（「悪い」1点～「良い」4点）で回答を得た（回答数43人、回答率95.6%）。そして17項目別に平均点を求め、その結果を翌週7月30日の最終授業の冒頭で学生に公表した（図10）。

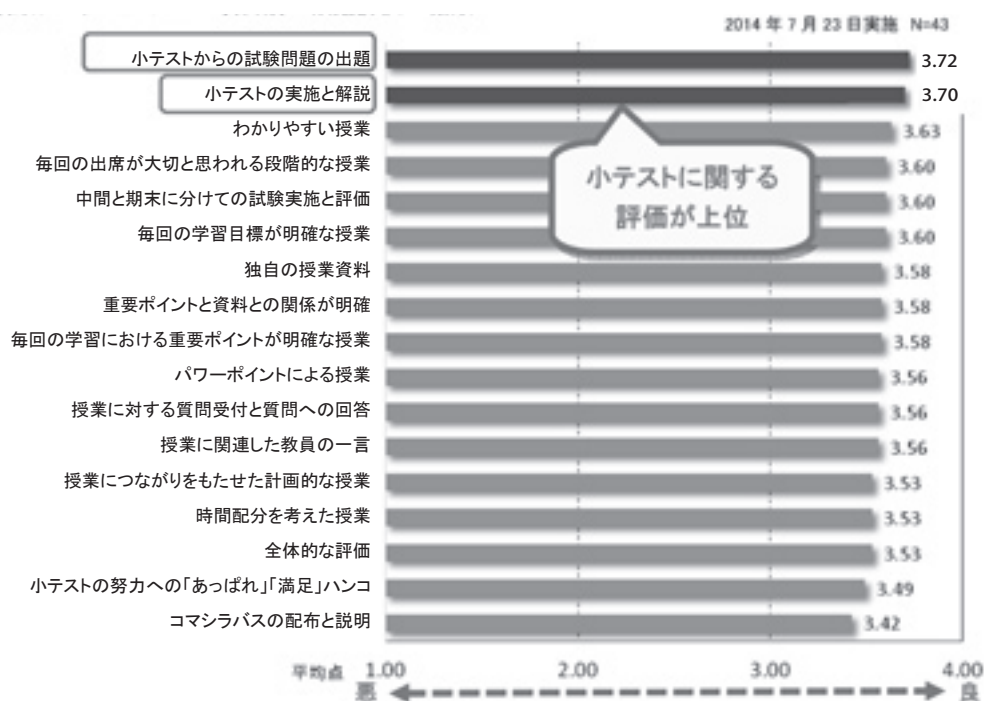
平均点が高かった上位項目をみると、第1位が「小テストからの試験問題の出題」で3.72点、第2位が「小テストの実施と解説」で3.70点だった。当初、毎回の小テストは学生にとって負担ではないかと危惧していた。しかし、ほとんどの学生が小テ

ストを「良い」ととらえていたことが判明した。アンケートからは「1回1回の授業の復習ができて助かった」「毎回行うことで、ポイントが押さえられ、学習の積み重ねができた」等の意見を確認できた。

そして第3位が「わかりやすい授業」で3.63点、第4位が「毎回の学習目標が明確な授業」「中間と期末に分けての試験実施と評価」「毎回の出席が大切と思わせる段階的な授業」でいずれも3.60点、第5位が「毎回の学習における重要ポイントが明確な授業」「重要ポイントと資料との関係が明確」「独自の授業資料」でいずれも3.58点だった。

逆に平均点が最も低かった下位項目は、「コマシラバスの配布と説明」（3.42点）だった。その理由と思われる内容を探したが、自由記述にはみられな

図10 授業アンケートでの17項目別4段階評価の結果



かった。しかし、上位項目第4位の「毎回の学習目標が明確な授業」や第5位の「毎回の学習における重要ポイントが明確な授業」を実施できたのは、まずコマシラバスがあり、それを用いて丁寧に説明できたからと思われる。同じく第5位の「重要ポイントと資料との関係が明確」になったのは、コマシラバスに各重要ポイントが資料の何ページに記載してあるかを明記できたからといえる。学生との意識の違いがみられたものの、教員としては「コマシラバスの配布と説明」の重要性を改めて認識する結果となった。

なお、調査項目が多いと、学生が面倒くさがって真面目に回答せず、各項目を「オール3」等のように同一評価することが懸念される。そこで、この点について検証したところ、「オール1」「オール2」と回答した人はともに0人(0%)、「オール3」(自由記述もなし)と回答した人は3人(7.0%)で少なかった。「オール4」と回答した人が13人とやや多かったが、そのうち9人は、そう回答した理由も含めて自由記述欄にも多くの意見が記載されていた。自由記述なしの「オール4」は4人(9.3%)のみだった。これらの結果は、学生が真面目にアンケートに回答していた証拠といえる。

VI. 2013年度生(現2年生)の試験結果との比較検証

2013年度1年生と2014年度1年生が行った同じ試験問題(中間試験として2014年5月21日実施)で平均点に差があるか否かを検証するため、この2群を比較した。その際、学生の性質の差異による影響を少なからず受ける可能性が考えられたため、学生のうち社会人経験を有する技術専門学校から委託された2013年度生9人と2014年度生2人を除き、標本の等質性を高めた。

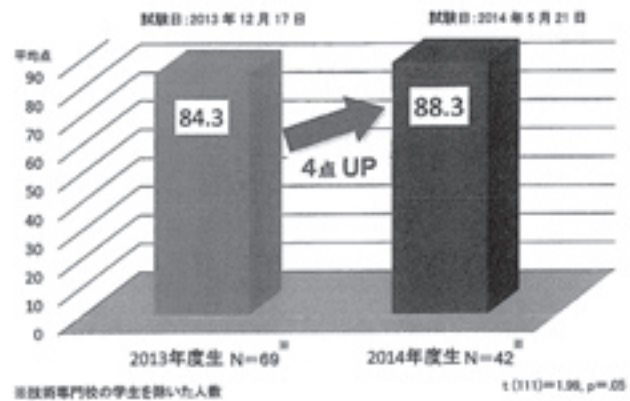
平均点は、2013年度生(69人)が84.3点、2014年度生(42人)が88.3点で、授業改善を行った2014年度のほうが4点アップした。t検定の結果、 $t(111) = 1.99$, $p = .05$ となり、平均点は2013年度生よりも2014年度生のほうが有意に高かった(図11)。

VII. 考察

1. 社会的な背景に伴う教育内容の焦点化と教員自身の発想の転換

少子化に伴う大学全入時代や学力低下問題、国家試験導入への対応における重要な視点として、教育内容の絞り込み、焦点化が必要になってくると考えられる。あわせて、教員自身の発想の転換が求められているのではないかと。つまり、今、求められているのは、「限られた時間により多くの知識を」という

図11 2013年度生と2014年度生における同一試験問題の成績(平均点)の比較



方向性でのみ考える価値観や思考様式ではなく、むしろ「時間があるなかで重要な知識を確実に」というような方向への発想の転換ではないか。

ただし、「重要な知識を確実に」といっても、それを達成できない学生がいることも忘れてはならない。したがって、個別指導の重要性も今以上に増してくると思われる。具体的には、対象となる学生との関わりを多くもち、学習目的を理解させていく。その際は、他の教員と十分連携をとり、学生の個性や学習意欲、学び方、習熟度等も踏まえて具体的な指導・支援策を模索していくことが大切になる。

2. シラバスやコマシラバスは学生と教員とが交わす契約書

小笠原ら(2002)によれば、授業では何らかの形で教員と学生の間に相互作用があり、それにより学生自身が学習への動機づけを高め、学生の主体的な学習が促進される授業が「良い授業」とした¹⁵⁾。それだけに、シラバスやコマシラバスは、単に形を整えればよいのではなく、学生と教員とが交わす契約書として考え、重要視する必要がある。

例えば、シラバスやコマシラバスの意味や目的等について教員のみが把握しておくのではなく、学生にもわかりやすい形で周知徹底を図り、学生と教員がコマシラバスを媒体として互いに今日の授業では、何を目標に何を学び、その重要ポイントは何かを共有できることが重要であると考えられる。

3. 学習意欲や自省を促すような科目に関する丁寧な説明

本稿では、初回オリエンテーションやコマシラバスでの説明の重要性を指摘した。これに関連して新富(2007)は、全体を見渡す重要性について登山を例に次のように述べている。「学生たちにいきなり『山のてっぺん』に立たせ、そこから自分の課題や学習することの意味を意識させる。ここに上がつ

てくるためには、自分に何が欠けているのかを見せることから始める。すると、学生たちは意欲的になる」¹⁶⁾。三宮(2009)も学習目標が明確であるほど、現実の自己リソース(能力、技術、知識、環境、時間等)に見合うものかを評価でき、学習目標に到達できなくてもその後の活動のための有用な情報を得ることができる」と指摘している¹⁷⁾。

つまり、カリキュラム全体における科目の位置づけも含めて科目の説明を丁寧に行えば、学習意欲を高めたり、反省的な振り返りができたり、次に生かされる可能性もあったりする、ということである。学生の授業に対する動機づけを促し、やる気を高めていくためにも、科目に関する教員の丁寧な説明が求められているといえる。

4. 授業改善をめぐる課題

大学教育の課題の1つは、学生が授業に出席するが、積極的に授業に参加し、自主的に学びに取り組む姿勢が弱いことである¹⁸⁾。それだけに、本研究で取り組んだコマシラバスの活用も含め、カリキュラムやシラバスのあり方を重視していかなければならない。

しかし、文献データベースCiNiiを用いて検索した結果、「介護福祉士養成教育」が143本だったのに対し、「介護、教育、カリキュラム」が8本、「介護、教育、シラバス」が5本にとどまった(2014年7月25日時点)。つまり、介護福祉士養成教育に関する研究は多くあるものの、「カリキュラム」「シラバス」といった内容に焦点をあてた研究は必ずしも多くはない。

したがって、介護福祉士になる学生自身が身につけるべき知識・技術等を把握し、主体的に授業に参加していくためにも、今後、さらに授業シラバスの工夫とその取り組み事例を蓄積し、それらを授業改善に向けて活用していくことが望まれる。

Ⅷ. おわりに

本実践の評価から授業改善の効果が示唆された。そこで、今回の取り組みから導き出された授業改善に必要と思われる4つの条件を示す。

①少子化・全入時代・学力問題等の社会的背景のなか、教員は「限られた時間により多くの知識を」から「時間があるなかで重要な知識を確実に」という発想への転換が大切になる。②その授業科目をとりまく全体像や関係性がわかるように、学ぶ目的意識や動機を促進するような説明責任を果たす。③小テストの実施やコマシラバスの活用等、授業のなかで復習の機会を設けたり、学生のやる気を促したりするような細やかな仕組みを工夫する。④授業の成

果は単一でなく複数要因で決まるため、複数の工夫の組み合わせによる複合的な授業改善を行う。

特に④の複数要因のなかには、教員個々の努力に加え、他の教員や現場で働く介護福祉士等との連携も含まれる。例えば、今回の授業改善は、埼玉福祉専門学校から「コマシラバス」の情報を得られたからこそ実践できたことを忘れてはならない。

ただし、以上の内容は授業改善に向けた必要条件といえるが、決して必要十分条件ではないことも付け加えておく。したがって、他科目でコマシラバスの活用や毎回の小テストの実施が展開できないかも含めて、今後も、本学介護福祉学科として更なる授業改善に向けて取り組んでいく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

注

- 1) 2014年度入学生からは介護福祉士養成校でも国家試験が義務化されることになった。本授業に取り組み始めたのが2014年4月であるから、当然、国家試験も視野に入れた授業改善であった。ところが、介護人材の不足が深刻化するなか、資格取得のハードルを上げれば人材不足に拍車をかけないと判断した厚生労働省は、2016年から実施される予定だった国家試験義務化を当面延期することを決めたのである(読売新聞, 2014.8.3)。本授業が終了した後の突然の「延期」であったため、本稿の記載内容が現況と異なる箇所も生じる結果となってしまったが、歴史的経過を重視する意味であえて修正しなかったことを記しておくたい。
- 2) オリエンテーション(orientation)は、ガイダンス(guidance)とは異なる。例えば、新入生や新入職員等が新しい環境に入った場合に受けるのがガイダンスである。そこでは、不慣れで事情のわからない人に初歩的な説明をすることになる。一方、オリエンテーションは、新しい環境に適応できるよう指導・教育することである。例えば、その学校に新しく入学した学生やその会社に入職した新入社員等に対して組織の仕組みやルール、学習や仕事の進め方等について説明する。したがって、本稿では、ガイダンスではなく、オリエンテーションを用いている。

引用文献

- 1) 中村裕子, 木村久枝, 中川英子ほか: 新カリキュラム下での「介護」領域の教育課題と教育方法, 介護福祉

教育, 第 17 巻第 1 号: p 78, 2011.

- 2) 社団法人関西経済同友会大学改革委員: 社会が求める大学の人材輩出戦略—まずは学部教授会の改革から, p 6, 2009 年 7 月.
- 3) 小笠原昭彦, 小玉香津子, 生田克夫ほか: シラバスの向上と学生の授業評価による教育改善について—名古屋市立大学看護学部におけるファカルティ・ディベロップメントの試み, 名古屋市立大学看護学部紀要, 第 2 巻: p 130, 2002.
- 4) 長慎也, 保福やよい, 西田知博ほか: De-gapper プログラミング初学者の段階的な理解を支援するツール, 情報処理学会論文誌, 55 (1): p 45, 2014.
- 5) 生田孝至: 子どもに向きあう授業づくり—授業の設計, 展開から評価まで, 図書文化, p 22, 2006.
- 6) 近藤克則: 私の授業実践—大学の授業改善と創造, 日本福祉大学社会福祉学部 FD (Faculty Development) 委員会, 2001.
- 7) 川延宗之: 介護教育方法論, 弘文堂, p 15, 2008.
- 8) 小笠原昭彦・小玉香津子・生田克夫ほか: シラバスの向上と学生の授業評価による教育改善について—名古屋市立大学看護学部におけるファカルティ・ディベロップメントの試み, 名古屋市立大学看護学部紀要, 第 2 巻: p 130, 2002.
- 9) 公益社団法人私立大学情報教育協会: 私立大学教員の授業改善白書—平成 25 年度の調査結果, p 6, 2014 年 5 月.
- 10) 文部科学省中央教育審議会: 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ, p 15, 2012 年 8 月 28 日.
- 11) 早川和江: 介護事例で学ぶ衣生活の授業実践とその評価, 介護福祉教育, 第 15 巻第 1 号: p 41, 2010.
- 12) 公益社団法人私立大学情報教育協会: 私立大学教員の授業改善白書—平成 25 年度の調査結果, p 4, 2014 年 5 月.
- 13) 公益社団法人私立大学情報教育協会: 私立大学教員の授業改善白書—平成 25 年度の調査結果, p 8, 2014 年 5 月.
- 14) 星野綾美, 坂本浩之助, 田村遵一ほか: 試験出題部分の講義資料内での予告が看護学生の学習意欲に与える影響, The KITAKANTO medical journal, 56(4): p 315, 2006.
- 15) 小笠原昭彦, 小玉香津子, 生田克夫ほか: シラバスの向上と学生の授業評価による教育改善について—名古屋市立大学看護学部におけるファカルティ・ディベロップメントの試み, 名古屋市立大学看護学部紀要, 第 2 巻: p 130, 2002.
- 16) 新富康央: 現代の学生気質と大学教育 (とりわけ介

護福祉士教育) の対応について, 介護福祉教育, 第 13 巻第 1 号: p 17, 2007.

- 17) 三宮真智子: メタ認知—学習力を支える高次認知機能, 北大路書房, p 82, 2009.
- 18) 公益社団法人私立大学情報教育協会: 私立大学教員の授業改善白書—平成 25 年度の調査結果, p 1, 2014 年 5 月.

参考文献

二木立: 福祉教育はいかにあるべきか—演習方法と論文指導, 勁草書房, 2013.